

Scramble Shot

のプレミエに出かけたが、満足のいく出来映えではあったものの、その不可解さは解消されなかった。

台詞をほとんど割愛したホモキの演出は標準の合格ラインに達していたため、恒例のプーイングも一声のみで、弱々しく消えた。下積み時代に練習ピアニストとしてオーストリアに長く住み、「オペレッタというジャンルを真面目に扱う」ことを学んだというファビオ・ルイジの音楽は真剣で美しい。演技付きとしては初役というベチャワは有名なアリア〈君は我が心のすべて〉を始めとして、豊かな声でしっかり聴かせてくれたが、オペレッタ特有の軽やかな部分はさすがに多少無理がある。リーザ役のユリア・クライターも、ニコラウス・アーノンクールとモーツァルトを歌っていた時代ならいざ知らず、現在の成熟した声ではスピードも高音さばきもキツそうだ。ミー役のレベカ・オルヴェーラとグスタフ役のスペンサー・ラングはかろうじてオペレッタらしいカップルだった。

「《微笑みの国》等の主要なオペレッタは不穏な時代に生まれ」と主張する劇場トップは、その役割を「真面目に」背負い、最後まで真面目過ぎる公演だった。

(中東生)



真面目過ぎるオペレッタだった? 《微笑みの国》から
©T+T Fotografie Toni Suter

Opera チューリヒ歌劇場が《微笑みの国》でシーズン終了

チューリヒ歌劇場今シーズンの締めくくりはオペレッタで、レハール《微笑みの国》。指揮は音楽監督のファビオ・ルイジ、演出はアンドレアス・ホモキ総裁、主演は正統派ヴェルディ・テノールのピョートル・ベチャワ。そのベチャワが「スターになって戻ってくる」と宣伝している。何か不可解な気分のまま6月19日